

(日本語原文)

筆談と漂流記の現場において編集および出版までの距離

許敬震

前近代に韓国と日本の知識人が会うときには殆ど記録を残した。この記録は紀行文、筆談、漢詩唱和の形態となっている。紀行文は帰国の後に一方的に記録したものであり、筆談と漢詩唱和は双方が同一の場で行き交わした記録を主に日本側で編集し出版したものである。筆談草や唱和草を編集し板刻を経て出版されるまで時間がかかるため、韓国の知識人たちは筆談や漢詩唱和の出版本を確認できないまま帰国した。従って、筆談と漢詩唱和の生々しい現場の記録が日本側編集者の意図により改変される可能性がある。

イ・ジハン(李志恒)が北海道に漂流した際、日本人の官僚と交わした筆談は、彼が戻ってきて東萊の官員に陳述した証言では部分的に改変されていたが、これは不注意によることもあり得る。新井白石の「坐間筆語」は八十年が経った後に修正を経て出版されたが、これは韓国使節団(通信使)の役割を貶すことに利用された。1763年になされた丁重な筆談唱酬の現場が込められている「雞壇嚶鳴」は、通信使が朝鮮に戻る前に攻撃的な序文がついたまま出版された。

実際に現場でなされた筆談と出版されたバージョンの差を嘘や歪曲であると容易く断定することは出来ない。しかし、筆談とその編集・出版の間の距離については研究する必要がある。しかも、韓日関係と関連した資料を研究する際には、それらの資料の真実性について綿密に検討すべきである。